



城

第五十回 小牧山城

～信長の挑戦・家康の転機～

深草 祐一

今回取り上げるのは、国指定史跡となっている小牧山城です。織田信長は、ここに本拠を移して美濃を攻略し、天下取りへの一步を踏み出しました。そして、徳川家康は、この小牧山に本陣を置いて小牧・長久手の戦いを戦い抜き、後に天下を奪うに至る実力を世に示しました。戦国の二人の英傑が目前の強大な敵に挑戦することで後の躍進の基礎を築いた小牧山城についてご紹介します。

織田信長の小牧山城築城

織田信長が小牧山に新城を築き、清洲城から本拠を移したのは永禄6年(1563年)。桶狭間の戦いの3年後のことです。前年に今川氏の支配から独立した徳川家康と同盟を結んでおり、今川氏の脅威が後退した今こそ美濃斎藤氏の攻略に注力すべく、美濃国境により近い小牧山へと踏み込んだといえるでしょう。近年の発掘調査により、予想以上に大規模な石垣の跡が発見されて話題になりました。平地の中に忽然とそびえる小牧山は、すっかり樹木に覆われてしまった今でもかなり目立ちますので、当時は相当な威容を誇ったと思われます。城の南側からは城下町の跡も発見されており、直線的な大手道など、後の安土城との共通点も見られることから、豊織系城郭の原点と言われているようです。織田家の勢いを見せつけ、美濃攻略戦を有利に進めようという意図があったのではないとも言われており、実際、



現在の小牧山城跡

美濃の国衆は次第に調略によって切り崩されていきました。そして、西美濃三人衆と言われた有力武将の調略が成ったところで、信長は一気に稲葉山城を攻め立て、遂に美濃を攻略したのです。その後、信長は稲葉山城あらため岐阜城へと本拠を移し、この頃から有名な「天下布武」の朱印を用いるようになって天下取りへ名乗りを上げていきます。そして、美濃攻略拠点としての役目を終えた小牧山城は自然に廃城となったのでした。

小牧・長久手の戦い(1) - 小牧での対陣 -

時代は下って天正12年(1584年)の春。廃城となっていた小牧山城が再び歴史の表舞台に登場します。天正10年に本能寺の変で織田信長が斃れた後、織田家中の後継者争いで優位に立った羽柴秀吉と、信長の次男の信雄とが対立し、これに徳川家康が加わって戦となった時のことです。信雄の支援要請に応えた家康が清洲城に入ったちょうどその日、信雄方につくかと思われていた織田家譜代の池田恒興が突如秀吉方について犬山城を急襲占拠しました。これを聞いた家康は、清洲城と犬山城の中間に位置するかつての小牧山城跡を先制占拠させます。そして、城跡に二重の土塁を築くなどして強固な陣地を構築しました。これに対し、大坂を進発して犬山城に入った秀吉も、小牧山の北方にいくつもの砦を築いてその間を土塁で結び、小牧山から5km余り離れた楽田の古城を改修して本陣を前進させ、信雄・家康連合軍と対峙しました。両軍の戦力は、一説には信雄・家康連合軍2万足らずに対し秀吉軍8万余であり、秀吉は圧倒的兵力によって信雄と家康を屈服させようとしていました。しかし、互いに固い陣地を構築して油断なく守っていたため、各地で小規模な戦闘は行われたものの、両軍にらみ合ったまま膠着状態となります。



小牧山山頂から楽田方面を望む

小牧・長久手の戦い(2) - 長久手の戦い -

ここで、池田恒興から、別働隊により家康の領国である三河を衝くという「中入り策」が提案されました。ただ、この策は、圧倒的な兵力差を活かしたものとはいえ、奇襲を成功させて敵に動揺を与えることができれば戦力分散の隙を突かれかねない危険な賭けでした。秀吉は当初この案を聞き入れなかったものの、再三の申し入れに、岡崎に火を放たらすぐに取り返すという条件付きで承認します。そして、池田恒興を一番隊、森長可を二番隊とし、戦上手の堀秀政を三番隊に付け、総大将として羽柴秀次を四番隊とした総勢2万の大軍が、夜、密かに岡崎へと進発したのです。しかし、この動きはすぐに家康に察知されます。ここが勝負所とみた家康は、小牧山に押さえの兵だけを残して1万余の軍勢で出撃し、夜には敵陣近くの小幡城に入って敵情を伺いました。一方、秀吉軍別働隊は奇襲作戦とは思えないゆっくりとした行軍で、さらに余計にも、池田隊が途中の小城からの銃撃に反応して城攻めを始めます。後から続く部隊は長久手の辺りで先陣部隊の攻城戦が終わるのを待つことになりました。そこへ小幡城から進撃した榊原康政らの家康軍支隊が後方から襲いかかったため、不意を突かれた羽柴秀次の四番隊はたちまち潰走してしまいました。後方の異変に気付いた堀秀政は秀次隊を救援すべく反転。軍列を整えると、勝ちに乗って攻めかかる家康軍支隊を撃破します。しかし、追撃の途中、小山の上に家康本陣の馬印が立つのを目撃しました。堀秀政は、家康自らが本隊を率いて出陣してきたとなれば利はないと判断。秀次と合流すると、池田隊と森隊に状況を知らせて速やかに撤退を開始しました。一方、池田隊と森隊は家康軍急襲の知らせを受けて軍を返しますが、そこには信雄・家康連合軍が待ち構えていました。長久手の辺りで両軍は激突。激闘の末、池田恒興と森長可はいずれも討ち死にし、両部隊は壊滅したのです。

その頃、楽田城の秀吉の元に秀次隊が敗走したとの

知らせが届き、秀吉は自ら2万の大軍を率いて長久手へ急行しました。うまくいけば、戦闘で疲弊した信雄・家康軍を大軍で押し潰すことができるはずでした。しかしながら、秀吉が夕刻に戦場近くの龍泉寺に着陣した時には、家康は早々に小幡城まで引き揚げており、秀吉は夜戦を避けて宿営します。すると家康は夜のうちに小牧山へ引き揚げてしまいました。翌朝これを知った秀吉は楽田城へ戻るしかなく、野戦での家康の強さをあらためて思い知るようになったのです。

この後、戦線は再び膠着し、ついに決戦の機会は訪れませんでした。その間、秀吉は豊富な戦力を使って伊勢の織田信雄の諸城を攻略させたことから、圧迫に耐えかねた信雄は、冬が訪れる頃に秀吉と単独で講和してしまいます。こうして戦の名分を失った家康もやがて講和し、軍を引きました。秀吉が実の母親を人質に出すことで家康の上洛を促し、臣下の礼をとらせたのは、それから2年後の天正14年(1586年)のことでした。この間に織田家中のライバルを全て排除し、毛利、上杉を統制下に置き、関白となって政治目的を達した秀吉でしたが、ついに家康を力でねじ伏せることができなかったことから、徳川家康は豊臣政権の中で一目置かれる実力者となり、秀吉の死後、天下を奪う者となっていったのです。

その後の小牧山城

小牧山は城として再興されることはありませんでしたが、徳川家康公の天下取りのきっかけの一つとなった場所として江戸時代を通じて顕彰され、荒らされることなく保存されたということです。明治以降、二重堀の外側土塁は崩されて道路となったものの、内側土塁は残り、その内側が史跡として公園化されました。城内の整備は今も続いています。山頂には天守閣様外観の歴史館が建てられており、濃尾平野を一望にすることができます。斎藤氏の稲葉山城(岐阜城)、または秀吉軍の犬山城や楽田城を遠望できる小牧山が重要な戦略拠点であったことを実感できると思います。



小牧山山麓の帯曲輪跡